



国際ペン大会京都セミナー2010

映像のアジア —— アジア文化の未来に向けて

Asia on Screen - For the Future of Asian Culture -

2010年10月1日(金) | 15:30—17:30 | 京都市国際交流会館イベントホール 京都市左京区栗田口 鳥居町2番地の1 | 入場無料 開場30分前

概要

近年、アジアの映画の国際市場への進出は目覚ましいものがあります。韓国、中国、香港、台湾、そしてイランなどの映画はよく日本の映画館でも上映され、映画祭等ではアジアの二十カ国ぐらいが出品の常連になっております。

こういう多様な国々の小説を日本語で読むことは至難です。小説や戯曲や詩で自国のことを世界に伝えることができたのは先進諸国の特権だったと言わざるを得ません。その点、映画は途上国でも質の高いものが沢山作られていて、字幕の翻訳だけで容易に世界に流通できるのです。

今や世界には国境を超えて人々が相互に理解し合わなければならない環境、資源、宗教、人権、などなど、沢山の問題があり、民衆のレベルで情報を分かち合い、他国の人の立場や状況を人間的な共感を持って理解しあうことができるようにするのが映画ではないかと思えます。

今日、世界の映画市場を圧倒的に制覇しているのはアメリカ映画、しかもその商業的な中核をなしているものはモノを壊して面白い映画

です。何度も何度も地球を破壊して、人類の滅亡の日に向かって心の準備をしているかのようでさえあります。

モノを壊す映画の対極にあるのはモノを大切にする映画です。モンゴル映画では、遊牧生活に必要な最小限のものしか持たず、しかもそれを大切にしているという生活のあり方が興味深く描かれています。

もっと自国の映画を大切にしようという動きがヨーロッパの国々を中心にして世界的にあって、自国の映画製作に補助金を出すという保護政策が先進諸国では広く行なわれています。

アジアの文化の独自性を主張するために、アジアの映画人たちは協力して、例えば合作映画を作ろう、という動きがしばしばありますが、実際には協力できるテーマがなかなかみつからなくてうまくゆかない場合が多いようです。

アジアの国々はそれぞれが独自の文化的伝統を持っています。中央集権的な映画のありかたと地方分権的な映画のあり方などの違いなども文化のありかたとして興味深いものです。(佐藤忠男)

プログラム

● あいさつ

ジョン・ラルストン・サウル (国際ペン会長) 中西 進 (日本ペンクラブ副会長)

● スケアトーク

篠田正浩 (日本、映画監督、早稲田大学芸術学客員教授)

クリスティン・ハキム Christine Hakim (インドネシア、女優・映画制作者、2002年日経アジア賞文化部門受賞)

ヴィカース・スワループ Vikas Swarup (インド、映画「スラムドッグミリオネア」原作者、駐大阪インド総領事)

佐藤忠男 (日本、映画評論家) (コーディネーター)

● コメント

春日いづみ (日本ペンクラブ会員)

※同時通訳: 日・英語あり 入場無料

事前登録票

インターネット登録が便利です。「日本ペンクラブ」を検索し、該当項目から事前登録画面を開けます。

<http://www.japanpen.or.jp/convention2010/>

ファックスの場合は、末尾にお名前とご連絡先のFAX番号等をご記入の上、次の番号に送信してください。

FAX 03-3508-1710 ※FAXによる申込期限: 9月25日(土)

※事前登録された方が優先です。登録希望者多数の場合は申込み順となります。定員に限りがありますので、確実にご入場いただくために、事前登録をおすすめいたします。※ご友人・家族などと一緒にファックス登録される場合は、この面をコピーし、お一人ずつご登録ください。

フリガナ

お名前

TEL

—

FAX

—

—